

<京都へ>

井本南海雄

<京都に行く前に>

京都に行くことになったとする。その目的はビジネス、観光、観劇、遊覧、祇園祭、寺社参り、京料理、会議、展示会、学会、大学での勉強、同窓会、芸事の弟子入り、修学旅行など色々あるだろう。だが、どんな目的であつたとしても、京都には、京都のことを勉強してから行った方がよい。それは旅行案内書を読んで、京都の歴史、宿泊するホテル、立ち寄るべき建築物の由来、観光地での食事、お土産などを予め調べておこうというようなものではない。京都には、他の都市や地方には無い特別な歴史を持つた行事、祭り、行儀作法、習慣、産物、景観があるのだ。

京都の、歴史と格式のある旅館では、宿泊客に旅館の浴衣姿で外出することを許さないのが普通である。老舗での買い物では客に対して「有難うございます」の上から目線ではなく、「おおきに」という京ことば（京都弁ではなく、京都語）が返ってくる。「おおきに」は単に有難うではなく「大いに、たくさん（VERY、VERY MUCH）有難う」という表現である。だが、お誘いなどの場では、「おおきに」という言葉が、実際には「たいへん有難いが“お断り”します」という例も多いのだ。「考えときます（考えておきます）」も多くの場合は「お断り」なのである。考えてなど全くないのだ。ビジネスの世界でも、これがあるから京都を知らない人には難しい。言葉の意味と同時に、その場の空気を読まなければならない。訪問先で思わず長居をしたときなど、「お茶漬（ぶぶずけ）でもどうぞ」と言われたら「そろそろ帰って欲しい」という意味なのだ。すなわち、京都では言葉も他の地域と違った意味を持っていることが、しばしばあるのだ。

ついでだが、全国各地で使われるようになった「御機嫌よう」や、「～で御座います」は京都語が語源で、京都から江戸や各地にお嫁入りした公家の娘たちによって運び出され、広まった言葉なのだ。「この前の戦争で～」と話を始めると「応仁の乱の時の事ですか」という返事が返ってくることもあるのが古い歴史を持つ京都なのだ。

祇園祭の時に売られる山鉾の粽（ちまき）が、お守りだと知らず、食べようとして開いたら中身が食べ物ではなかった。「これはインチキだ。京都で騙された」と東京の新聞に怒りの投書をした東京の観光客がいた。だが、その投書を掲載した新聞社も共に、京都では笑い物になった。これも京都に行くには勉強が必要な理由である。これらは京都の地形と景観にもよるのかもしれない。

<京都の地形>——京都（単に京ともいう）は大きな内陸盆地にある城壁都市なのだ。

—鉄道の駅は全て旧市街の端にある

—旧市街地内には高速道路が見当たらない

—京都市は海港と空港が無い大都市—

京都市の地形と市街の様子は日本の大きな他の主要都市とはかなり異なっている。京都

の地形は、そこに長い間、住んでいる人々の行動や生活習慣、さらには文化に影響を与えてきたと思う。京都の市街や住宅は三方が山に囲まれている内陸盆地で海に面していないし、港がない。それは、あたかもヨーロッパにおける、外敵の襲撃に備えるために石や煉瓦、土塁で作られた防壁で囲まれた古い城壁都市のようである。京都にやって来た西洋人、特に隣国と国境を接しているヨーロッパの人々は、その形によって得られる、外敵の侵入から守られているという雰囲気、故国にいるのと同じような近親感と安堵感を持つのだと思う。

1878年（明治11年）、横浜から北海道を探検旅行した英国の女性探検家イザベラ・バードは1894年（明治27年）に再度来日し、長崎・神戸・京都を訪問している。その旅行記では神戸から開通して間もない汽車で京都に向かう。京都では同志社女学校の寮に宿泊した。そこで新島襄やデービスと日本の教育について語った時のことを、京都の雰囲気は落ち着き、安心できると記している。

京都では、西欧の歴史ある古い都市と同じように、市内には自動車用の高速道路が見当たらない。高速道路を建設するには古い街並みを壊す必要があるのだ。京都では、烏丸今出川地区を初めとする、西洋の技術を使った、赤レンガで作られ、重要文化財に指定されている歴史ある建物が木造の町家と並んで、いくつもあるのに驚く。

<東京方面から京都へ向かう>

東京方面から新幹線、または車で京都へ向かうとする。関が原を過ぎると関西地区だ。列車の右側の窓から琵琶湖が見えてくると、その湖面の向こうに比叡山と、それに続く比良の山並みが屏風のように立ちはだかっているのが見えてくる。京都はそれを越えた向こう側だ。やがて草津だ。かつて、ここから大津までは、琵琶湖の湖上を舟で近道をとる方法もあった。だが、お勧めではなかった。現在でも比良山から吹き降ろす比良嵐で運休するJR湖西線の例のように強風に遭い、行く手を塞がれて余計な時間を要する危険があった。これが近道は転覆の危険がある「急がば回れ」の語源になったとされる。草津市を過ぎ、大津市に入り、東山トンネルを抜けると京都に着く。車では国道1号線（旧東海道）利用なら逢坂山の峠を越える。峠には「うなぎ屋・かねよ」が今もある。十返舎一九の滑稽本「東海道中膝栗毛」では、京都を目前にして、野次喜多が「かねよ」の店主に鰻を誘われる。だが懐が寂しくなっていたので、「鰻の焼ける香りを嗅いただけで腹いっぱいになった」と断ると、「それなら、鰻の香りの代金を払え」と店主にからまれた、とされる店である。お江戸日本橋から始まる東海道五十三次の上りは、京都市内の鴨川に架かる三条大橋の西詰めだ。今、そこには京に着いたばかりの、弥次喜多の旅姿の銅像がある。京都へ高速道路なら蟬丸トンネルを抜ける。鉄道も、車も、人も、京都の手前に横たわる障害物の逢坂山をトンネルで抜けるか、峠を越さなければ京都には入れないのだ。かつて鉄道はトンネルが出来るまでは峠の急勾配を蒸気機関車が登れないので、逢坂山の南側の伏見方面へ、時間をかけて遠回りして京都に向かっていた。今では、その路線の一部がJR奈良線になっている。

<西国方面から京都へ向かう>

九州や西国方面から列車で、車で、京都へ向かう場合。大阪と京都の府境、大山崎付近に

差し掛かると、左側から天王山が迫ってくる。天下分け目の天王山だ。その山麓の大山崎にはサントリー・ウイスキーの蒸留所や国盗り物語に登場する離宮八幡宮一別名「油の神様」ー（本邦初製油の地とされる）ーが見えて来る。下流の野崎参りで知られる河内平野は製油の原料になった菜の花の栽培が今も盛んである。右側、淀川の対岸には山上に石清水八幡宮、中腹には様子を見る意味の語源になった「洞が峠」のある男山が接近してきて、狭い左右の門のようになっている。また、松花堂弁当の発祥地とされる屋敷が残る。その狭い隙間に、宇治川、桂川、木津川の三川が此处で合流して淀川となって大阪湾に向かって流れている。淀川は、かつては京都と大阪を結ぶ主要な水上交通路で、枚方、守口は宿場町だった。水上交通路の京都の始点は木屋町通り二条から並行する高瀬川である。ついでだが、木屋町の名の起りは高瀬川で運ばれた建築資材の材木屋が並んでいたことによる。

西国方面から京都へは淀川を含めて名神高速、国道1号線、国道171号線（西国街道）、新幹線、JR東海道線、阪急京都線、京阪電車と、京都と大阪を結ぶ全ての交通機関がこの狭い部分に束になって集中している。入口が狭いから外敵を防ぐのには便利だった。狭いから阪急電車とJRが同時に並行して走る光景もよく見られる。最後に出来た名神高速道路は狭くて道路建設の余地がなかったので天王山をトンネルで抜けた。この地点から北東が京都盆地である。その地形のため、冬になると此处を境に周囲の景色が一変する。盆地だから冬は大きく気温が下がって寒く、夏は逆に蒸し暑い。

<京都の地形と景観>

大阪平野を過ぎ、大山崎を抜けると、左手、京都の西の方には西山連峰が見える。同時に、その続きの一番高い愛宕山（924米）が見えはじめる。京都駅に近づくと、北の方に標高1,000米以下の比較的低い山が壁のように重なり合って見えるのが北山連峰である。東の方に大きく見えるのが比叡山（848米）で、そこから南に東山連峰が連なるのが見える。通称、東山三十六峰である。

このように、京都は西山連峰と愛宕山、北山連峰、比叡山と東山連峰、と三方が三つの山の連なりに囲まれている。この三方から京に入るには昔は峠道を越えた。今はトンネルを掘って通る場所もあるが、通る場所は限定されるのだ。大阪からの淀川沿いも狭い隙間を通らねばならない。三方は入口が限定されているが、唯一、南の一方だけが開いていて、その入り口の先はゆるやかな丘陵地を越えて奈良盆地、すなわち平城京へ続く広大な盆地である。よくもこんな形の、山に囲まれた広い盆地があったものだ。どうやって、それを見つけたものだろうか。だが、そんな地形だから、京都ほどの大都市なのに飛行場が無いのだ。盆地であるため、作る余地が無かったのだ。

それなのに、京都市の南西に当たる京都府八幡市の石清水八幡宮のそばに飛行神社があるのが不思議だ。創建は1891年（明治24年）。動力付きの模型飛行機の実験に成功した二宮忠八によるもので、ギリシヤ風のユニークな神殿に驚く。神社には航空機の研究開発に当たった殉職者が祀られている。空港が無い京都に飛行神社があるのだ。

京都盆地の底面部分は北から南に、ゆるやかに傾斜している。盆地の東側に賀茂川（また

は加茂川、鴨川とも書く・出町柳から下流は鴨川である）が南に向かって真っすぐに流れ、西端には嵐山を通過して大堰（おおい）川（または桂川）が、南方面からは木津川が奈良の方から北に、京都に向って流れる。鴨川は琵琶湖からの宇治川（琵琶湖付近では瀬田川である）に合流し、さらに大山崎付近で桂、宇治川、木津の三川合流で淀川と名を変えて大阪湾に向かって流れて行く。

<改めて京都の地図を見る>

—京都への主な交通機関は京の中心を掠めて通っている—

京都の地図を見ると、新幹線も JR 東海道、奈良線、山陰線、近鉄奈良線は東西に基盤の目になった京都市の旧市街地域の南端をかすめて通っている。通りで言えば南端に近い八条である。JR 京都駅はそこにある。旧市街は此处から北に広がる。それは中央駅が都市の入り口か端にあるのもヨーロッパの古い都市に似ている。従って JR で京都駅を通過しても、「端っこを掠ただけで、京都を通ったことにはならない」と京都の人は言う。高速道路もそうだ。名神高速道路は京都駅か遠い、更に南の方を走っていて、市内を通らない。東京、横浜、名古屋、大阪などの大都市では市内を循環する高速道路が走っているが、京都では走っていない。IC の名も京都東と京都南で京都は無い。国道 1 号線も昔から京都市内の東端と南端を通っている。近年になり、交通渋滞緩和のため、国道 1 号線は経路を何度か変更して更に南に移動している。そのため、車で通過しながらでは古い京都の町並は更に目にできなくなった。

京都は他の大都市と違って高速道路が市内を走っていない。頭上に車を見ることは無いのだ。歩行者用の横断橋も非常に少ない。現存している横断橋も古くなったものは修理せずに、解体されている。

京都に乗り入れている阪急、京阪、近鉄の私鉄各社も昔から街の中央部には入っていない。今でも地上では目にできない。かつて阪急電車は四条大宮が終着駅だった。京阪電車は三条までだった。それも鴨川の東岸を走り、延長に際して地下に潜った。近鉄は八条の京都駅が終点だった。これはヨーロッパの都市と似ている。郊外電車が市内中心部に乗り入れていたら今の京都の様子や風景は大きく違っていたかもしれない。阪急が四条河原町に地下鉄で延長して乗り入れたのは、山鉾巡行の邪魔にならないためだった、と言えは納得できる。ただ、阪急の市内乗り入れは市電が撤去された代替交通機関としての面も大きい。

その京都も次第に近代化している。よく見ると街中の至る所に古いお寺や町屋が並んでいることに気付く。そのお寺が沢山並ぶ寺町通りという通りもある。かつての為政者が強制的に寺院を、この通りに集めたのが通りの名前の由来になった。千二百年以上も日本の中心地であった京都は、町中に歴史的な謂れがある場所、通り、建物が多数あるのだ。

世界で千年以上にわたって繁栄している大都市の数は多くはない。京都はロンドン、パリ、ローマと並んでその一つだ。京都には日本の歴史の大部分が凝縮され、比較的完全な形で保存されている。たくさんの日本人のほか外国人も、それを見に京都にやって来る。日本を理

解するためには東京ではなく、京都を訪問せねばならないのだ。

そのために京都は町の美観を維持する色々な対策をしている。例えば、四条通には古くから電柱と通りの空を横切る電線が見当たらない。背が高い山鉾が円滑に巡行することができるためである。それを見る観光客のために、歩道を拡張する工事も最近行われた。そのため、普段の日の四条通りは車両の混雑が増えたが、京都の人は文句を言わない。

さらに、京都の町を歩いていて気が付くのは店舗のデザインや看板の色彩が地味なことだ。全国的に店舗展開を行っているファースト・フード、ファミリーレストラン、コンビニエンス・ストア、スーパーマーケット、それにガソリン給油所や自動販売機の看板、店舗の建物の色彩が他の地方と違った地味な構造と色であることに気が付く。古都の景観、景色に溶け込んだ色を使用するように指導が行われているのだ。

<京都は建都 1200 年を超える>

奈良の平城京から京都に都が定められた平安遷都は延暦 13 年（794）だった。従って建都 1200 年は 1994 年（平成 6 年）だった。だから建都 1220 年を過ぎている。しかし、その間に 10 年間、京都の南西の長岡京に都造りの時代があった。長岡京の完成を待たずに平安京に遷都したわけだが、その理由は何だったのだろうか？

その平安京の都市作りは最初から碁盤の目であった。そのモデルは唐の長安と洛陽だったとされる。今日、京都の市中と市外を洛中、洛外と呼び、京都に向かうことを上洛すると言うのはその影響である。平安京の時代、町の中心は現在の位置よりも西の方にあった。今では痕跡が残っているだけだが南北に朱雀大通り（現在の千本通りとされる）が走り、それを中心に東西に広がっていた。四条大橋の傍にある「先斗町（ぼんとちょう）」は町名ではなく地域のことで、ポルトガル語で端っこを意味する PONTO だとされる説が有力である。すなわち京の町はずれだったのだ。やがて町の全体と中心の東部への拡大と移動がはじまり、鴨川を越えて何もなかった東側の地区にも新しい町の東山地区が出現発展したことで、先斗町はそれに飲み込まれた。

京都は宮廷と貴族と武士と町衆（ブルジョア）と庶民（プロレタリア）の町

<京都の町衆の活動>

中世の終わり、応仁・文明の乱で京都の町の大部分が焼失したが、間もなく商人の活発な活動で復興し、町は活気を取り戻します。室町時代から戦国時代、そうして織田信長が京都に入洛して全国を統一し、そのあと豊臣秀吉の天下になります。

大阪夏の陣で大阪城が落城し、政治の権力は徳川家康が握り、政治の中心は江戸に移ります。しかし宮廷は京都に残り、貴族たちと上層町人たちとの交遊の中で華麗な文化が生まれました。桂離宮はこの時代に建築されました。

角倉了以は近世初頭の京都に現れた英傑で、町人であり、貿易商であつた。自力で大きな

外洋船を作り、海外貿易で巨万の富を築きました。今日では誰でも気軽に行ける木屋町通りのお屋敷料亭、がんこ屋敷「二条苑」は、かつて角倉了以が作った庭園でした。その後、明治の元勳山縣有朋の邸宅になります。二条木屋町には角倉家の物流倉庫がありました。淀川を上ってきた貿易品を、伏見からそこまで運ぶために角倉了以が自費で掘った運河が、森鷗外の小説「高瀬舟」でも知られる「高瀬川」です。高瀬川の周辺の木屋町の名は高瀬川を利用して建築材の材木が運ばれ、材木屋が沢山あったことによります。また、高瀬川が作られなければ、森鷗外の、あの小説「高瀬川」も書かれなかったことになります。高瀬川の取り入れ口は「二条苑」の庭園内にあって、今も鴨川の水が流れ込んでいます。高瀬川はごく浅い川なので、そこで使用する舟は底が浅く、平らな特殊な舟形となつています。それを「高瀬舟」と呼びました。高瀬舟の名前は今も各地に残っていて、京都では高瀬川の木屋町二条には実物が繋船されて展示されています。

高瀬川に沿った周辺の地形は、京都の町づくりに必要だった大量の建築資材である材木が高瀬川を使って大量に運び、荷揚げした様子が想像できます。運河の両岸には、それを取り扱う材木屋（木屋）と、作業をする人がが多数に存在したことの名残りです。

<祇園祭は町人（ブルジョア）の祭り—山鉦>

—町人とは何か—。

京都の市民の祭りといえば祇園祭です。活気に満ちた華やかな日本一の町人のお祭りです。葵祭が古代以来の朝廷と貴族のお祭りであるのに対し、祇園祭は近世の町人たちの、町衆のお祭りなのです。ついでに、「後の祭り」という言葉は7月1日から始まる祇園祭は16日の宵山、17日の山鉦巡行の後、祭りと言いながら、鉦も山車もなくなり、後片づけだけで祭りと言いながら何もない—ということから出た言葉とされます。

当時、京都の市中には角倉家、茶屋家といった大金持ちや町人が沢山住んでいて勢いを得ていました。この時代、「町人」とは表通りに店を構え、不動産を所有する商工業者のことです。祇園祭はそのような、当時あたりしく起ってきた町人階級の人たちが、自分たちの経済的な勢いを見せるためのパフォーマンス、または行事だったとも考えられます。あの豪華な、中世ヨーロッパやペルシアから輸入された織物など、鉦の飾り物がその事を示す証拠品と言えます。この飾り物は世界で唯一、長い歴史を持つ京都だったからこそ、長い間に亘って大事に保存されているのです。祭りの目的は悪疫退治祈願だった、などは後世の理由付けではないでしょうか。そうして町人の中には、町人になれない多くの労働者（プロレタリア）がいたのです。祇園祭の鉦の上でコンコンチキチンと鉦を囃しているのは町人の旦那衆（ブルジョア）で、鉦の綱を曳くのは裏店（うらたな）に住む労働者の人たち（プロレタリア）だったのです。両者の間には大きな貧富の差があったのです。だが、そのことが京都を豊かさ、色々な文化を残したのだと言えます（それはアダム・スミスの国富論そのものかもしれません）。今は綱を曳く人たちの多くは学生アルバイトに変わり、外国人留学生も加わっている—そんな時代になったのです。

< 京都は産業都市 >

京都を発祥地とする会社、京都に移ってから成長した会社、そうして現在も本社を京都に置く企業は種類も数も多い。例えば、

島津製作所、日本電池、日本電産、堀場製作所、任天堂、京都セラミック、オムロン（社は創業地の「御室」に由来）、ワコール（滋賀県彦根出身の和江産業）、村田製作所、京都機械、京都ダイキャスト、松竹、和菓子の虎屋、宝酒造、大丸百貨店、高島屋百貨店（滋賀県高島市出身）、日本新薬、中央公論社、佐川急便（京都の生産物を運ぶ飛脚便から）、野崎印刷、パールトン（創業は長崎県の佐世保市潮見町・海軍の依頼によって開発した衣服の撥水技術を持つ）、餃子の「王将」・・・など、いずれも古い歴史と特徴がある企業であり、よく知られた企業が多数である。

近世の京都は今風に言えば一大商工業都市だった。鎖国で海外貿易が封じられていても、商業は盛んだった。例えば、織物については世界有数の工業都市だった。今も西陣織は伝統産業である。当然ながら、それに関連する京染、友禅など優美な染物に仕立てあげる染色産業も盛んである。このことが織物機械、染料製造、運送、流通などの関連産業の技術開発と商業の発展をもたらしたのです。今出川新町にある大学の建物は、かつての島津製作所の工場跡である。町中で工場が大きくなることで京都の景観が悪化するのを嫌って移設したと聞いている。そのように市内には重工業の工場は見当たらない。

琵琶湖から疏水という運河を作って水を引いて車馬輸送に代わって船による美濃、近江、北陸地方との大規模な物流を行いました。更に、琵琶湖との水位の落差を利用して、東山三条近くの「蹴上」に日本最初の水力発電所を作ったのが京都で、その電力を利用して、日本で最初に市内電車を走らせたのは京都である。

< 永遠の都ー京都 >

京都市の人口は約 147 万、区は上京、中京、下京、右京、左京、西京、東山、伏見、山科、南、北の 11 区から成り立ち、半分以上の区に「京」が付いているのに気が付きます。南、北を除けばいずれも歴史に出てくる地名である。京都府は旧国名の山城、丹後、丹波の大部分であるが、現在の京都市は山城の国の北半分の地域にあります。

明治の初め、東京遷都で天皇が東京にお引越しになり、首都が東京になると人口の移動が起こり、京都は寂れて人口は一時、20 万程度に減った。例えば、御所の西側を発祥の地とし、今も其処に店舗が残る和菓子の虎屋などは売り上げが 7 割も減ったという。それでやむを得ず、東京に進出した。しかし、その後 130 年の間に京都の市民（町人）は自ら新しい産業を起し、町の近代化をはかり、大近代都市になった。

< 京都は文化と学問の都市 >

東京遷都で京都は政治の中心ではなくなりました。しかし、その後、現在に至るまで日本の文化の一大中心地であり続けています。すなわち学問、芸術、宗教の都である。京都市内には大学が 37 校ある。隣接都市を加えると 39 校になる。NHK の大河ドラマ「八重の桜」にも登場したが、日本で最も古い大学の一つで、且つ初めてのキリスト教主義の同志社大学ができたのは仏教の中心地だった古い都の京都である。そのため開校には、色々と文化の違いでの反対運動や妨害に遭遇した。その大学の、いくつかの赤レンガ作りの建物は、その歴史的価値と適切な保存により、国の重要文化財に指定されている。大学の烏丸今出川にある西門の横には「薩摩藩邸跡」の石碑が京都市によって建てられている。色んな歴史があるのだ。

そのように、京都は異文化を受け入れてきたのである。以来、京都の人は学生を「学生さん」、と「さん」付けで呼び、更に「勉強しはって偉くならはる人やから」と大事にしてくれる。学生が皿洗いをすれば、無料で食事をさせてくれる店が今もある。その店の一つはチェーン店が全国展開をするほどに発展している。古本屋が目立つのも学生が多く、古い都市の証拠だろう。京都は勉強するには最適の環境があるのだ。市の総人口の 11 人に 1 人は大学生とされ、その比率は他の大都市と比べて異例に高い。京都市外や大阪、奈良、滋賀県からの通学生を加えると学生の比率はもっと高くなる。京都の大学出身者のノーベル賞受賞者の数も他の都市より多い。

京都には歴史的な名所旧跡が多い。国の文化財の 20% が京都にある。奈良や鎌倉と同じように古都であり、観光都市だと思っている人は多い。だが違うのだ。実際は多様な精密工業、IT 産業、ファッション産業などの産業都市、商業都市という古くて新しい都市—永遠の都市なのである。観光都市は京都の一面なのだ。

< 京都は保守と革新の都市 >

京都の町は古い町家、古物商、古道具屋、古本屋に満ちている。他の大都市と比べても多いし、伝統の町、保守の都市でもある。だが政治の世界では革新系の市長、知事、国会議員を多く出している。これには色々な説がある。

京都人は表面は政治に冷淡だが心は敏感に時の動きを先取りしているという説。固有の文化に自信があるから新しい思想に寛容という説。日頃の伝統の重圧で溜まった鬱憤があって、時に何かの時に弾けるとい説など。だが本当のことは京都人にも分からない。精密な分析が必要だ。だが頑強な保守の中に極めて革新的な半面を持っているのは事実だ。京都を出発点とする多くの大企業が「本社を東京に移転しませんか」と誘われると「東京に行って何かエーことありますのんか」と答えて、多くの企業は京都から動かない。大阪・神戸の企業とは違うのだ。ただ、東京に本社を移転させるには事情もある。政府が事業計画の強力な許認可権を持つため、やむを得ず東京に移転をしたのだと。地方の過疎化の原因の一つだろう。

<京都の旧市街・中核部の地名と住所表示>

京都の古い地名、通りの名には、殆どすべてに由来があるとされる。例えば、烏丸通りは川原（カワラ）洲（ス）際（マ）とされていたが、地下鉄工事の時に河原の跡地が発掘されてかくにんされた。今出川は鴨川の支流が東洞院から寺町まで流れていた川の跡が通りの名になった、などである。

京都の旧市内の街路は正しく東西南北に碁盤の目になっている。京都では二条通りから北が上（かみ）、で南が下（しも）である。通りには西欧の都市と同じように、それぞれ名前があって地名は町名の前に、座標式に通りの交点で示す。烏丸四条（からすま・しじょう）は烏丸通と四條通の交点である。その地点からのズレは東入ル（ひがしいる）、西入ル、上ル（あがる）、下ル（さがる）という。表示は少々長くなるが、通りの名前を順に辿って行けば目的の場所に行き着ける仕掛けだ。

例えば：1）京都市東山区三条通南二筋目白川筋西入ル二丁目北木之元町

：2）京都市中京区烏丸今出川東入ルー筋目上ル相国寺門前町

；3）京都市中京区下塔段町　　のような簡単な住所もある。

そうなるタクシーでドライバーに行先を告げるのが大変だ、と思うかもしれないが心配ない。1）なら「東山三条」、2）なら「烏丸今出川」と短く言えば、そこからの東西南北を聞いてくれる。

だが3）の地名もあって、即座に行き方がわからない場合もあります。

京都の通りのうち、御池、五条、堀川の通りが他の通りと比べて異常に広いのに気が付きます。これは第二次世界大戦中に、焼夷弾攻撃による木造町家の延焼被害の拡大防止対策としての強制疎開が行われた跡です。これも歴史遺跡かもしれません。この三つの通りはどう見ても京都らしくない。

大都市京都は通りの数が多いから、通りの名前と順番を覚えるのは大変である。そこで通りの名前の頭文字を北から順に並べ、リズムを付けた、「丸竹夷二押御池〜」（まるたけえびすに、おしおいけ〜）で始まる「わらべ歌」が自然発生的に作られた。、本当は大人が通りの名を覚えるために作った知恵だと思う。

<京都の食べ物>

京都の家庭では毎日のように京料理を食べているわけではない。京独自の食材を色々と使用し、気候などの要素も加わってはいる。だが、他の地方と大きくは変わらない。これを京都では「おばんざい」と呼ぶ。朝食は前日の残り御飯を使った粥と「すぐき」などの京漬物だけという商家も多い。朝から、ゆっくり食事をしていたら商売ができない、と言うのが表向きの理由だが、粥なら食事する人数の増減によって水加減で量が調整できる利点がある、というのが「京の商家の知恵」である。

<おばんざい>

- ① 京都のごく日常の家庭料理、またはオカズのことで、「お番菜」と書く説が有力である。「番」は番傘、番茶など同意の「ありふれた」「普通の」といった意味であろう。
- ② 海産物の身欠き鯨、棒鱈、それに京野菜と呼ばれる京都周辺の農家が育てた旬の季節野菜など、手近かにある飲食食材を使い、手間暇かけて作った、どこの家庭にもある食事のことで、
- ③ 安価であり、
- ④ 薄味であり、
- ⑤ 「京料理」とはチョット違う。

今では「おばんざい」の専門店もある。

<京野菜と京の漬物は芸術品>

京都には「おばんざい」を支える、1200年の歴史を持つ京野菜と呼ぶ野菜がある。錦市場には京野菜の専門店もあって、ほとんどの京野菜が手に入る。かつての大宮人から現代の庶民まで、嗜好と農家の創意工夫によって改良され続け、「京懐石」や「おばんざい」に使われてきた。それは素朴な中の贅沢である。

夏の季節には加茂茄子、丹波松茸、丹波黒豆、山科茄子、鹿ヶ谷南瓜、桂瓜、伏見唐辛子、万願寺唐辛子、ささげ、などが、また季節によって九条葱、山科唐辛子、聖護院かぶら、壬生菜（みぶな）などが出回る。京野菜は加茂、山科、伏見、万願寺など、それぞれ京都または京都周辺の産地名が付くものが多い。周辺とはいえ、万願寺などは京都から90キロも離れた舞鶴の地名であり、そこが原産地である。それはそれぞれの産地の、長い間の努力と改良によって、見栄えも、味も、他の地域産とは違う芸術品のような野菜を作り上げ、ブランド化したということなのだ。

京野菜を使った漬物類も独自の発達を遂げた。その種類も多種多彩で、他の地方ではお目にかからない物も多い。近年では、季節に合わせて南瓜や筍、トマト、長いも、果物のリンゴなどを使った漬物も漬物専門店の店頭に並ぶのは他の地方には無い光景だ。京の台所、錦市場には「漬物だけで食事」をさせる食堂もあるのだ。歴史ある「すぐき」がある一方で季節の野菜、それも南瓜やトマトを漬物にするのは京都ならではの発想と工夫だろう。

<鯖鮓と鯖街道>

京は遠うても十八里

古くから日本海側の若狭と京都の距離を言う言葉である。京都の鯖鮓は京都の地理的な位置が作りだした食物である。海から遠く離れていて、輸送に時間が掛り、冷蔵・冷凍技術が無かった時代、京都では新鮮な海の魚が入手できなかった。そこで、鮮度を保つために鯖に一塩して、「御食国（みけつくに）若狭の小浜」から京都の出町柳まで十八里（約

72キロ)の道を、途中には峠越えもある道を一昼夜かけて人が担いで、足で京に運んだ。一塩されて運ばれてきた鯖は、到着した頃には丁度いい塩梅になり、京の料理人の工夫で鯖寿司が作られた。その鯖を運んだ道は鯖街道として道中の宿場と共に、今に残っている。この鯖街道はルートがいくつかあるが、鞍馬を通り、出町柳に至る街道が著名である。近年では鯖街道、約80キロのコースを走るマラソン大会も毎年、開かれている。この距離がスゴイ。早朝6時に最初の組のスタートが行われる。

御食国とは朝廷に海産物を御食料として貢ぐことを指定された若狭、志摩、淡路などの旧国の事である。

※京都でも本屋は減ったが、古本屋はまだ頑張っている。銭湯は減った。